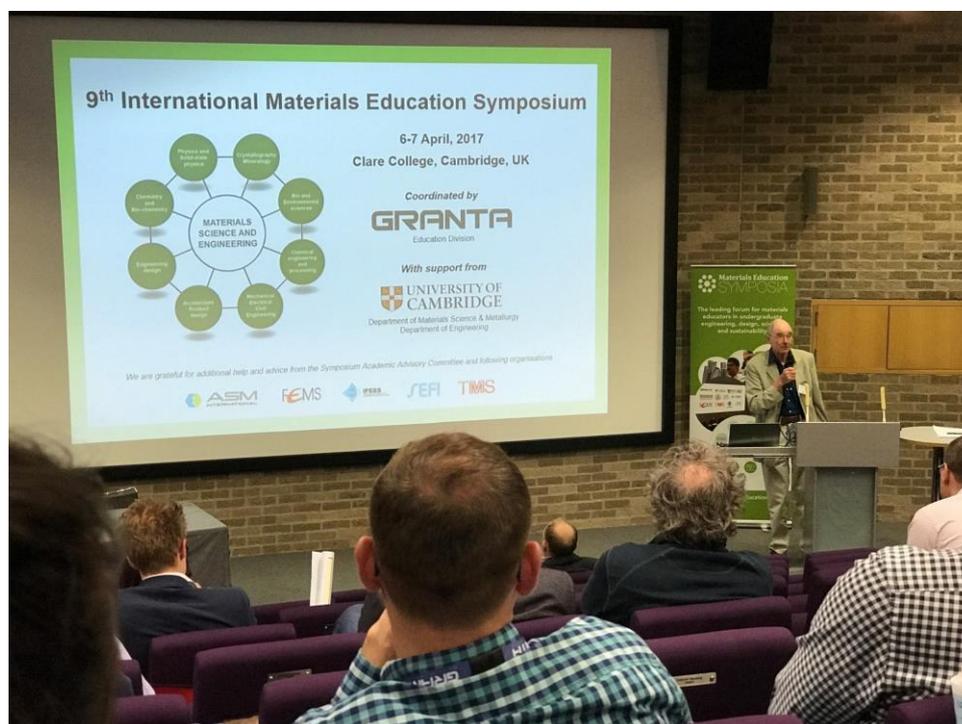
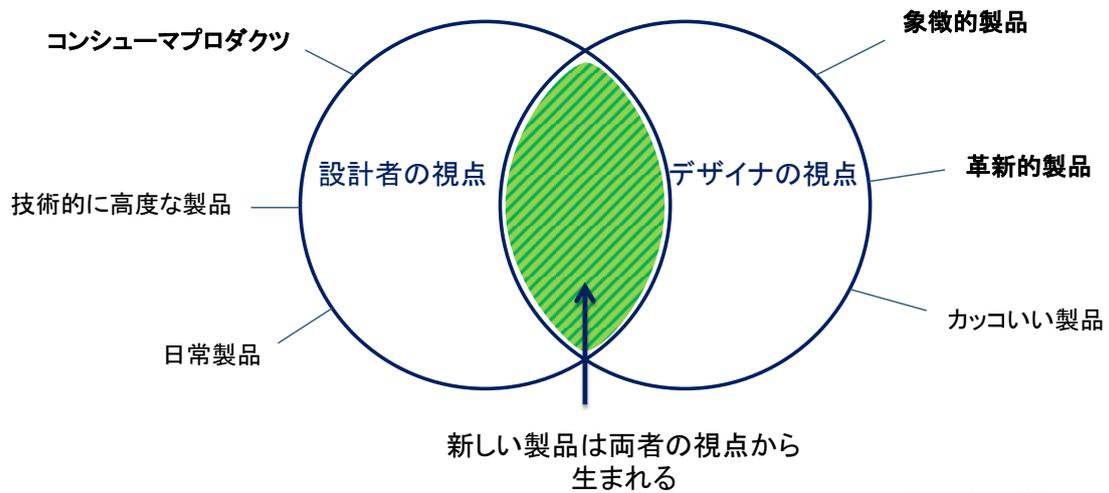


4月4日～7日に Ashby 法に関するシンポジウムならびにワークショップが英国ケンブリッジで開催されたので報告する。第2回で紹介した昨年12月にシンガポールで開催されたシンポジウムの本部開催に相当する。Ashby 先生はケンブリッジ大学の材料学科の教授であり、Ashby 法の普及を目的としたツール、データベースの開発を行っている GRANTA 社もケンブリッジに本社を構える。ケンブリッジでのシンポジウムは毎年開催され、今回第9回を迎える。シンポジウム参加者は150名余りで、米国2名、中国2名、日本2名、シンガポール1名以外はヨーロッパ圏内からの参加であった。30件の口頭発表、30件のポスター発表があり、材料を起点にした設計、デザインをキーワードにした設計教育視点での活発な意見交換が行われた。私も日本機械学会で実施している“1DCAE 概念に基づくものづくり教育”に関して口頭発表を行った。本講座で紹介している“Ashby 法と 1DCAE の融合による製品開発プロセス”を工学教育の視点から紹介した。本講座では機械設計の視点でデザインと生産を結びつけることを、Ashby 先生は生産（材料）の視点で設計とデザインを結びつけようとしていることが確認できた。目指すところは同じであり、このように多様な取り組みが存在することは機械設計の革新にとって有益なことだと感じた。



シンポジウムの様子ならびに Ashby 先生の冒頭挨拶

この両者を結ぶのが材料(生産)



GRANTA資料に私の解釈を付加

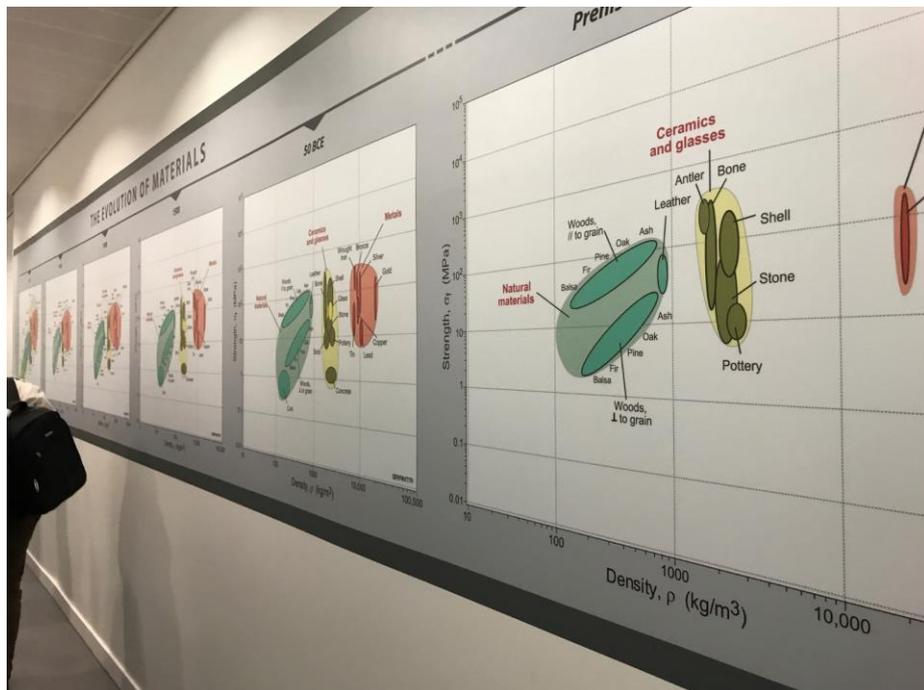
Ashby 先生が目指しているところ

シンポジウムに先立って開催されたワークショップでは最新の Ashby 法に関するツール、データベースの紹介が実習付きで開催された。材料データベースを核に Ashby マップ、製品データベースと製品設計の方向に拡大していることがと見とれた。あとは、これらを使って設計者がいかにしてものづくりの仕組みを理解して実行していくかだと感じた。この意味で、今回参加したシンポジウムを含む種々の手段による設計のための手法の啓蒙、普及活動が重要と再確認した。

今回、シンポジウムが開催されたケンブリッジはロンドンのキングスクロス駅（ハリーポッターの 9 と 3/4 線で有名）から北に電車で一時間ほどのところにある街で、今回のシンポジウムは Clare College でワークショップはケンブリッジ大学材料学科で開催された。ケンブリッジ大学材料学科の見学もあったが写真のように Ashby マップの時代による変遷の様子が大きな壁に展示されているのが印象的であった。



シンポジウムが開催されたケンブリッジの会場



ケンブリッジ大学材料学科内の Ashby マップ